

# 大和田 新さん(ラジオ福島 チーフアナウンサー)

## 彩 発見

障害者の祭典「きょうされん全国大会」が、21、22の両日、福島県郡山市熱海町で開催された。きょうされん(旧称・共同作業所全国連絡会)は、障害のある人たちが働く小規模作業所や授産施設などの全国組織。東北で初の開催となったこの大会には、障害者を含め全国から2000人以上が集った。縁があって、私が大会実行委員長を務めた。開会式の後、「鎮魂から復興へ」と題し、2時間半のステージを担当した。私にはどうしても全国へ伝えたい「福島からのメッセージ」があった。それは、復興を担う高校生をはじめとする若者たちの前向きな姿だ。

オープンングは、県立いわき海星高校有志による「じゃんがら念仏踊り」。同校は津波で2人の生徒が犠牲になった。友への鎮魂と震災で亡くなった全ての人のために彼らは踊った。チームリーダー

### 鎮魂から復興へのメッセージ



## 若者の前向きな姿こそ

の高橋純香さんが言った。「私たちがこれまで、多くの人たちに支えられてきました。今度は私たちが笑顔で支える番です」

次に、「障害者と震災」をテーマに、いわき市の主婦、志賀としまさんと、仙台市のマッサージュ師、早坂洋子さんに話を聞いた。志賀さんは白血病の治療のため骨髄移植を受けている。股関節に障害があり、歩行時につえを使用。宮城県気仙沼市出身で、両親と義理の姉の3人を津波で亡くした。原発

事故の影響で避難を強いられた。ガソリン不足のため、父の火葬に立ち会えなかった悲しみを淡々と語った。

早坂さんは、目と耳が不自由。情報入手が困難で、沿岸部の津波を知ったのは震災の翌日だった。早坂さんは震災と向き合った障害者の記録映画「生命(いのち)の進行役を務めている。

「震災で明らかになった障害者を取り巻く問題は以前から指摘されていた。日ごろからさまざまな

ながりがあれば、救えた命もあつたはず」と語った。

休憩をはさんで「鎮魂」から「復興」へと場面は転換した。幕が上がる。そこには、津波で被災したいわき市・薄磯の豊岡中学校のピアノがあった。このピアノの復活ドラマに寄り添ってきた沖繩出身のシンガー・普天間かおりさんが「奇跡のピアノ」で熱唱した。

アンコールはKiroroの「未来へ」。「一緒に歌いましょう」。普天間さんが呼びかけると、ステージには50人を超える人たちが集まり、大合唱となった。鳴りやまない拍手の中で、普天間さんはピアノにそっと触れて頭を下げた。

「復興」のステージのフィナーレは、県立小名浜高校フラダンスチーム。同校は「フラガールズ甲子園」で2年連続優秀賞を受賞。しかしこの春、3年生の卒業と同時にメンバーは1人となった。このままではフラガールズ甲子園に出場できない。草野七海さん(2年)は、先輩の姿に「地域をフラダンスで笑顔にする」の精神を絶やさないために、同級生や後輩にフラの魅力を説いて回った。その熱意に2人の後輩が心奪った。フラ甲子園まで2カ月を切っていた。

おおわだ・あらた 神奈川県横須賀市出身。1977年ラジオ福島入社。編成局専任局長・チーフアナウンサー。納豆と豆腐が大好きで、阪神タイガースをこよなく愛する。趣味はギャング。大和田新のラヂオ長屋「月曜Monday(もんだい)夜はこれから」などを担当している。

指導している元フラガールの横山真子先生は「フラ甲子園の時は緊張していたけど、今日は完璧。大舞台を経験する度に、彼女たちは成長していく」と目を細めた。

原発廃炉まで40年と言われる。気の遠くなるような歳月の先にある福島県の復興・復旧を担うのは若者たち。高校生に見捨てられたら福島県は終わる。政治家や行政は分かっているのだろうか。

TOUHOKU SAHAKKEN